

## アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

### 今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その8

今回のテーマ

シンジの心の喪失と再生について考えていく

前回のおさらい

エヴァンゲリオン Q においては、シンジがこれまで経験してきた相次ぐ喪失を受け入れられず、もがき苦しむ中、より事態を悪化させてしまう。

シンジはその事態に直面し、強い絶望、取り返しのつかない様な罪悪感の中で身動きが取れず、なにか、もぬけの殻のような状態になってしまう。

今回のシン・エヴァンゲリオン 劇場版は、そうなったシンジの喪失に伴う心の再生と成長を描いている様に感じられる。

そしてこの心性が思春期の人々の心の揺れ動き、喪失感それと同時に希望と再

生という点で非常に似通っているものを感じる

喪失という観点でボウルビィの悲哀の心理過程を説明した。

### 悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

Q の結末において、シンジは、取り返しのつかないほどの罪悪感に苛まれ、無気力な状態に陥った。外見上は状況が非常に悪化しているように見えるが、心の中では、ボウルビィの喪失過程における③「断念と絶望の段階」に進んでいるように思われる

そこでシンジの心の成熟を進めていく（③→④の移行 または抑うつポジションへの移行）には、シンジ自身を受け止め、抱える環境が必要不可欠である。

2. シンジが目を覚ました時、周囲の状況はどのような反応であったか？

3. 綾波は市井の人々との関わりの中でどの様に変わったか？

4. シンジの心は綾波との交流の中でどう変化していったのか？

Q の結末において、シンジは、取り返しのつかないほどの罪悪感に苛まれ、無気力な状態に陥った。そんな絶望に打ちのめされていたシンジの心を受け止める、その母親の様な環境がトウジやケンスケの暮らす第三村であった。彼らに温かく迎えらることでシンジは立ち直り始めるきっかけを作り出した様に思われる。

前回は第三村の世界がウィニコットのいう潜在空間であるという視点でまとめていったが、違う視点で捉え直していきたい。

Q からシンエヴァの第三村のシーンまでのシンジの心の変化の過程に関して、  
Q からシンエヴァにかけてのシンジの綾波への思いの変化は、象徴的に描かれているように感じられる。

エヴァの破でシンジは綾波を失ってしまったが、その喪失を受け入れられず、  
Q で出会う初期ロットの綾波に対して、敵意や怒りの感情を感じているようであった。それは綾波がいないとシンジは思えず、悪い綾波がいるとシンジは捉えたと考えられる。それはメラニー・クラインのいう悪い乳房であり、妄想分裂ポジションの心性であると考えられる。その後、綾波が第三村の人々との交流し、一人の個として成熟した綾波と交流した時にシンジは「なんでみんな、こんなに優しいんだよ」と言ったが、そこで彼は贖罪を受け入れ、立ち直っていく。そしてその後、綾波が「名前をつけて欲しい」という問いにシンジは「綾波は綾波だ。他に思いつかない」と言っているが、それはある意味、悪い綾波でも良い綾波でもない、綾波なんだということ言っており、まさにこれは抑うつポジションの心性である。

しかしすぐに綾波は「ここじゃ生きられない」と言い残し、力尽きてしまう。  
このシーンは残酷で、ショッキングであるが、ある種、乳児が乳房から離れ、離

乳していく様、分離个体化を描いている様にも思われる。

そうしてシンジは、音楽プレイヤーという移行対象を携え、現実を受け入れ、エディプス葛藤に向き合うためにヴンダーに戻る決意を固めたと考えられる。

## 5. ヴンダーに乗り込んだシンジは以前に比べてどの様変わったのか？

再びヴンダーに乗り込んだシンジであったが、ヴンダーの乗組員のシンジに対する思いはQの様な恐怖とも怯えともつかない様子とは違い、鈴原サクラをはじめ、受容的になっている様に感じられる。

これは、シンジが自分自身を受け入れるようになり、周囲の人々に対しても攻撃的ではなく、受け入れる心を持つようになったことを象徴しているように思われる。

その象徴的なシーンはヤマト作戦前夜のシンジとアスカが取り交わした会話のシーンである。

アスカ「最後だから聞いておく。私があんたを殴ろうとした訳、分かった？」

シンジ「アスカが、3号機に乗っていた時、僕が何も決めなかったから。助けることも、殺すことも。自分で責任、負いたくなかったから」

このシーンではシンジの心の成熟が認められる。自身がその時なぜそうしてしまったのか？そしてその行動によってアスカを如何に傷つけてしまったのか？ということを理解し、自分が責任の元であるという発言である。つまりシンジの心性は抑うつポジションのなかで、現実を受け入れ、一人の人間として成熟している。

このようにシンジはこれまで自分の周りに起きたこと、そして心身の発達によって生じた喪失を受け入れ、成熟し、一歩ずつ大人の階段を登っている。そうしてシンジは父と対峙する心の準備を着々としているように感じられる。

その後、ヴンダーの乗組員はネルフ本部にヤマト作戦を行い、総攻撃をしかけ

る。

しかし、シンジがエヴァに乗るということに関して、ヴンダーの中の乗組員たちの思惑は色々異なっており、

## 6. シンジとヴンダーとの葛藤

ヴンダーはヤマト作戦を行い、総攻撃を仕掛けるが、作戦はうまくいかず、アスカも亡くなってしまう。そしてヴンダーも制御システムを乗っ取られてしまう。人間を捨てたゲンドウがヴンダーの前に訪れ、ヴンダーの主機であった初号機を奪い、さらに深層の「マイナス宇宙」へと向かってゆく。ヴンダーはマイナス宇宙には手出しできないためにミサトとリツコ達は何もできず、手をこまねいていた。それを見たシンジはエヴァに乗ってゲンドウを追うことをミサトに願い出る。

しかし、シンジがエヴァに乗るということに関して、ヴンダーの中の乗組員たちの思惑は色々異なっていた。そしてシンジのへの思いに関して、サクラ、

ミドリをはじめとしたヴンダーの人々の気持ちが激しくぶつかり合う。

前回そのシーンを取り上げた。

それは「あの花」の境内でジンタンやゆきあつ達が自分の思いの丈をぶつけ合ったシーンを彷彿とさせた。情緒的に激しい思いをぶつけ合う中で、互いの思いを深く受け止めカタルシスを迎え、皆が一つの目的に向かって突き進むことにつながったと考えられる。

また、このシーンでこれまではめていることを苦痛に感じ、カヲルがはずし、彼が身代わりにつけた DSS チョーカーをシンジは「僕は、僕の落とし前をつけたい」と言って、自ら装着したことが興味深い。

DSS チョーカーは首輪みたいなものであるが、首輪はキリスト教において聖職者の象徴であり、神の軛（くびき）を象徴するとも言われている。神の軛（くびき）とは、神の教えに従い、神に仕えることを意味する。聖職者は、首輪を着用することで、神への奉仕を誓っている。そしてこのシーンで考えたとき、ミサトは「シンジ君のとった行動の責任は全て私にあります。現在も碇シンジは私、葛城ミサトの管理化にあり、これからの行動の責任を私が負うということです。私は今のシンジ君に全てを託してみたい」と言っているが、シンジはそのミサト

の意志に従い、仕えるということを表明し、その中で父と対峙することを表している様に感じられる。

それはこれまでのシンジとは異なっている。これまでの（序から Q まで）シンジは周りの言葉に耳を傾けず、暴走する中で自分の思いを遂げようとしてきた。それ故に「自己の感情に飲み込まれ、覚醒リスクを抑えられない（Q のリツコの言葉）」とリツコに言われた様に、周りからは猜疑心の目で見られ、DSS チョーカーをはめられてしまう。そしてシンジ自身より周囲に対して迫害的に感じ孤独感を強めていったと思われる。それが今、シンジは成熟し、自ら DSS チョーカーをはめたということは、自分の行動に責任を持つという思いを持つ様になったことであり、まさに心の成熟を表している。

→そしてシンジはマリの改 8 号機に同乗してゲンドウを追うためにマイナス宇宙へと突入し、その世界でゲンドウと対峙する。

## 7. シンジと父との対峙 父殺し

マイナス宇宙の中でシンジは父ゲンドウと対峙する。そこでシンジはゲンドウとぶつかり合う。その中でシンジとゲンドウはぶつかり合いながらも交流を

していく。それはシンジがこれまで触れることを怯え距離をとってきたものであり、シンジの殻であり、A-T フィールドである様に感じられる。

そしてゲンドウとシンジはゴルゴダオブジェクトに衝突する。

### 1) ゴルゴダオブジェクトとは

ゲンドウが次の様に言っている。

人ではない何者かが、アダムスと六本の槍とともに神の世界をここに残した。私の妻、お前の母もここにいた。全ての始まり。約束の地。人の力ではどうにもならない。運命を変えることができる唯一の場所。

ゴルゴダの丘：イエス・キリストが十字架に磔にされたとされる場

→キリスト教徒にとって、苦しみや悲しみ、そして救いの象徴になっている。イ

エスがこの地で自らの命を捧げることで、人類の罪を贖い（あがない）、救いの道を開いたと信じられている。

ここで今一度エディプスコンプレックスについておさらい。

エディプス葛藤 父・母・自分の三者の葛藤：社会性の芽生え

ギリシャ悲劇のエディプス王（父を殺し母と結婚する話）から着想

子どもは異性の親に結ばれたい願望があるが、一方で敵わないとも感じる。

→社会性（自分でも母でもない第三者の出現）の獲得と未熟さへの葛藤

## 2) 父と対峙しぶつかるシンジ

そこからゴルゴダオブジェクトは苦悩を引き受け、新しい運命を切り開く場  
という意味になっており、シンジはゲンドウによってシンジの追憶の世界へと  
誘われていく。

その目まぐるしく移り変わる世界、NERV 本部にあるこの物語のはじまりに  
でてきた、エヴァの格納庫から始まり、第3新東京都市、ミサトの家、2年A組  
の教室、綾波の部屋、ジオフロント、加持の畑。それらはこれまでのシンジの日  
常生活の世界なのだが、その中でシンジとゲンドウはエヴァを介してぶつかっ  
ていく。それはあたかも夢の世界の様である。

その世界の中でシンジはことごとくゲンドウのエヴァに打ち返されてしまい、全く敵わない。それはシンジがこれまで日常生活で抱いてきたエディプス葛藤の象徴の様にも感じられる。

シンジがゲンドウとぶつかる中であることに気が付く

シンジ「何だ？ 僕と同じ動きだ。やりづらい」

ゲンドウ「第十三のエヴァ。希望の初号機と対を成す、絶望の機体だ。互いに同調し、調律をしている。これも私に必要な儀式だ」

ゲンドウは一気に畳み掛ける。

シンジ「もうやめてよ父さん——ああっ」

シンジは強烈な突きを食らってよろめく。そして場面は、かつて自暴自棄の時に訪れた北の湖の廃墟に変わっていた。澄んだ湖面のほとりに倒壊した建物が積み上がっている。その白い漂白された場所で、たった一棟だけ残されたNERV 施設の跡地が背後に迫る。

ゲンドウ「無駄だ。お前のひ弱な力では、私を止めることは出来ない」

ゲンドウは威圧的な猛攻で初号機を押し出し、その施設の跡地へ向かって突

き飛ばす。

横に倒れたシンジが見た光景は、かつてカヲルとピアノを弾いた場所だった。

その輝かしい記憶がシンジを立ち上がらせた。だがゲンドウは、その足元を槍で

すくい、第3村の丘へ投げ飛ばした。

ゲンドウ「まだ分からないか」

シンジ「うわー！」

ゲンドウ「力でも敵わない。まして暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではないからだ」

第3村に投げ飛ばされたシンジは、戦闘によって破壊された無残な光景を目撃する。トウジ、ケンスケ、綾波…そこで生きていた人々の顔が、シンジの頭をよぎる。

シンジの乗る初号機は立ち上がると、槍を地面に突き立てて、13号機と正面から向き合う。

ゲンドウ「そうだ。これは力で決することではない」

シンジ「うん。父さんと話がしたい」

## 【考察】

ここまでのシーンでゲンドウがのったエヴァとシンジがのったエヴァがぶつかっているが、シンジは全然父ゲンドウがあまりにも強すぎて、彼に太刀打ちできない。それはまさに中学生が大人である父に果敢に挑むが、力では全然敵わない様と似ている。確かにシンジの抱くエディプス葛藤を乗り越えるには、確かに父親を倒すことである。しかしゲンドウが「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」と言っていた様に力で父を打ち負かすのは所詮、被支配—支配の立場が変わるだけである。それは、つまり肛門期の関係性のままなのである。

シンジはそれでも必死にゲンドウを倒そうと立ち向かってきたが、シンジがゲンドウによって第3村（3というのがミソ）に投げ飛ばされたときに、それまで触れ合ってきた人々のことを思い出す。そこでシンジは我に返って槍を突き立て、ゲンドウとの争いを止める。

ここまでシンジはゲンドウを悪い対象と捉えている。しかしゲンドウ自身が「希望の初号機と対を成す、絶望の機体」と言い、互いが同調して調律していると話している様に、良い対象と悪い対象は表裏一体なのである。そのことにシンジは気づかず、一心に攻撃し続け、跳ね返されることを続ける中（妄想分裂ポジ

ションの心性)で、最終的に第3村を破壊してしまう。そこで自分が抱えられてきた良い対象達も傷つけてしまったのではないか?ということに気が付き、心を痛み、思いやりの心を持ち、争いを止める。まさに抑うつポジションへの移行を表している。

シンジにとって大切なことは、対象を知り、現実を受け止めていくことである。それが社会への一歩を踏み出すことであり、エディプス葛藤を乗り越えていくことなのだと考える。そのことにシンジは気がつき、「うん。父さんと話したい」とシンジは言ったと考える。

W.ビオンは人の出会いは認知からではなく、情緒的体験から始まるという様なことを述べている。例えば、誰か好きな人とデートに出掛けて、すごく緊張して、ドキドキして、でも何か嬉しくて、苦しくてそういう激しい情緒を抱くかもしれないし、お母さんになって初めて自身の赤ん坊に出会った時に言葉にならない情緒が湧き起こる様に。自分の中に色々な情緒が湧いてくるのが人間の特徴であり、その情緒と情緒を持って人は繋がると松木は述べている。

シンジの「父さんと話したい」と述べたことは父・ゲンドウと深く情緒的に

関わり、自身のそして父の真実を深く知りたいという思いであり、それはこれまでの世界観や自分観、人間観を衝撃的に貫き根底から覆すことになる。シンジはその覚悟でこの言葉を言った様に感じる。

その覚悟からのシンジと父・ゲンドウとの深い情緒的な関わりが今後の父との会話で行われていく様に感じられる。

### 3) 父との対話

シンジ「父さん。父さんは、ここで何がしたいの？」

シンジは NERV 本部の司令室で、ゲンドウと向かい合っていた。シンジの立ち位置からゲンドウが席につく執務机はだいぶ離れている。

ゲンドウ「このゴルゴダオブジェクトでしか起こし得ない、アディショナルインパクトだ。それが、私の神殺しへの道へとつながる。そのために最後の二本の槍を、ここに届けた」

そしてゲンドウはアディショナルインパクトを起こす。

(中略)

シンジ「父さんは何を望むの？」

ゲンドウ「お前が選ばなかったA・T・フィールドの存在しない、全てが等しく  
単一な人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も  
悲しみもない、浄化された魂だけの世界。そして、ユイと私が再び会える安らぎ  
の世界だ」

シンジ「父さん、もうやめようよ」

ゲンドウ「なぜだ？ なぜシンジがここにいる？」

シンジ「父さんのことが知りたいから。寂しくても、いつも父さんに近づかない  
ようにしていた。嫌われているのが、はっきりするのが怖かったんだ。でも、今  
は知りたい。父さんのことを」

ゲンドウ「A・T・フィールド？ 人を捨てた、この私に？」

ゲンドウ「まさか、シンジを恐れているのか、この私が」

シンジは、携帯音楽プレイヤーを彼に差し出す。

シンジ「これは捨てるんじゃなくて、渡すものだったんだね。父さんに」

シンジ「僕と同じだったんだ。父さんも」

ゲンドウ「ああ、そうだ。ヘッドフォンが外界と私を断ち切ってくれる。無関心を装い、他人のノイズから私を守ってくれた。だが、ユイと出会い、私には必要がなくなった」

ゲンドウは、その後ゆっくりと内面を語り始める。

### 【考察】

父との争いの後にシンジは父の思いを知ろうとする。そこで父の目論見をしる。それは彼自身がアディショナルインパクトを起こし、神を殺そうと考えていること。そして自身が神となり、A・T・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界、他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界と創造しようとしていることである。

一見、その世界は非常に理想的な世界のように聞こえるが、ミサトやリツコ達をはじめとした人々の考え（リツコ「私たちは、神に屈した補完計画による絶望のリセットではなく、希望のコンティニューを選びます」、ミサト「私は、神の力をも克服する人間の知恵と意志を信じます」）を無視し、寄せ付けようとならない独善的な考えであり、何か誇大妄想的でさえある。

そしてゲンドウを続けて次の様に言っている。「ユイと私が再び会える安らぎの世界だ」ゲンドウは彼の妻、ユイの喪失を受け入れられずに、ボウルビィの喪の作業の②思慕と探求・怒りと否認の段階（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）にとどまっており、そこで躁的防衛をしているようにも感じられる。これは新劇場版・破の最後でシンジが綾波の喪失を否認し、綾波を蘇らせ、彼女と一体になろうとする万能的な充足や歓喜の幻想にひたる心性となんら変わらないのである。

シンジは躁的心性で起こすことになったニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しめてしまったことを深く知っている。だからこそ「父さん、もうやめようよ。」と説いている。そして成熟したシンジはより父を深く知ろうとする。そこで父はA-Tフィールドを発動するが、ゲンドウがシンジと情緒的

に関わることを怯えていることが明らかになる。そしてシンジが「僕と同じだったんだ。父さんも」という。それは父と子の情緒が共有されていく瞬間のよう  
に感じられる。その情緒に触発されるなかで父の過去が語られていく。